

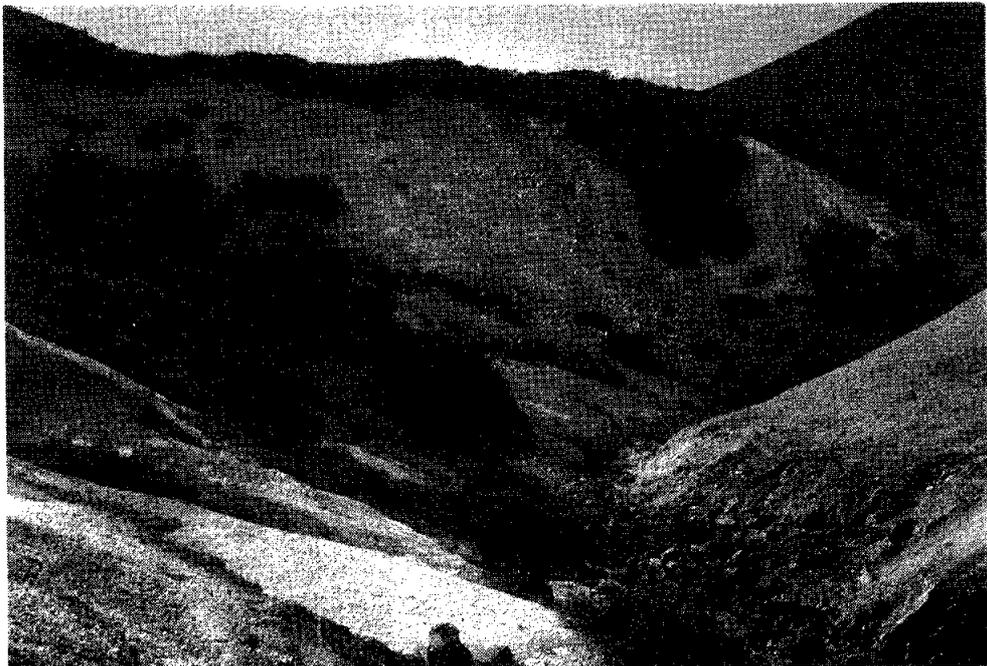
NCS HOKKAIDO

Nature Conservation
Society of Hokkaido

1999年10月 NO.108

..... CONTENTS

チヨットひとこと..... 畠山 武道..... 2	連載・獣医さんのお話シリーズ(5)..... 9
『トドの回遊生態と保全』の刊行 和田 一雄..... 3	自然保護学校のお知らせ..... 10
国後島・羅臼山の植生..... 佐藤 謙..... 4	「会員の拡大」のお願い..... 俵 浩三..... 10
北海道・各地のニュース..... 6	活動日誌、要望書、新入会員他..... 11
「北方四島の自然保護を考える」 シンポのお知らせ..... 8	お知らせコーナー..... 12
	夏休み作文コンクール結果等..... 12



国後島・羅臼山の硫気孔原 撮影・佐藤 謙

最近アメリカ森林保護事情

夏休みを利用してアメリカの森林管理の最近事情を調査してきた。おもに国有林を見て回ったが、巨大なダグラスファー、ウエスタンヘムロックが文字どおり林立する原生林の迫力には圧倒された。かつての北海道も、こうした巨木に覆われていたのであろう。また、国有林には必ずビジターセンターがあり、職員（女性が多い）が親切に対応してくれる。住民をシャットアウトした日本の営林署とは大きな違いだ。



つぎに、キャンピングカーの多さにも驚かされた。大自然の中の片側3・4車線のハイウエーを時速120キロ前後でひた走る彼・彼女らを見ていると、自然に対する熱い思いが伝わってくると同時に、いささか奇妙な気分になったものだ。実際、訪問者が増えすぎたために、対策として実験的に3ドルの利用料を徴収している国有林もある。

しかし、アメリカ人の自然好きは、日本のオートキャンプブームのような付け焼きではなく、子供の頃からの体験によって身についたものである。こうした自然への強い愛着が、アメリカの分厚い自然保護制度を支えているのである。

こんなことばかり書いていると、何を調査してきたのかと怒られそうなので、少し専門的な話をしよう。

最近のアメリカの自然保護は、生態的知識の応用、科学者との協働、計画の絶えざる見直しなどを内容とする生態系管理（エコシステム管理）が中心となっている。しかし、生態系管理とは、いかにも抽象的で分かりにくい。そこで、それを具体化したのが、流域管理である。これは、ある河川に雨水が流れ込む範囲（集水域）をひとつの単位として、河川環境維持を目的に、森林、湿地、氾濫原、農地、市街地、海岸、干潟、魚類・野生生物生息地、レクリエーション地域などを総合的に管理するものである。しかし、流域管理にとってもっと重要なことは、関係する連邦・州・郡の行政機関、民間団体、住民、インディアン部族などが一堂に会し、協力関係を築くということである。住民参加が流域管理の基本である。

ワシントン州では、州全体を62の流域に区分し、市民、自治体、インディアン部族が共同で流域管理計画を作成した場合には補助金を交付する制度がスタートし、すでに27の流域管理計画が承認をうけていた。また、住民がボランティア活動や資金集めに飛び回り、一度埋め立てられた公園内にサケの溯上する河川を蘇らせた個所を実際に案内してもらった。日本でも、河川局や林野庁が流域管理を口にしてはいる。しかし、言葉は似ているが、中身は全く違う。そこには、こうした住民参加の思想が全く欠けているからである。

（副会長・小樽市在住）

は
た
け
や
ま
た
け
み
ち

『トドの回遊生態と保全』の刊行

野生生物保護学会会長 和田 一 雄

今年、私達の若い仲間が中心になって最近の調査をまとめたのがこの労作である。

トド研究は日本ではまだやっと緒についた段階にある。海獣談話会として1970年～80年代に断続的に北海道周辺海域で生態・保全に関する研究を行ったが、その後少し途切れた。最近5年間北海道大学水産・獣医両学部の大学院生を中心に帯広畜産大学、酪農学園大学、日本獣医畜産大学、日本大学等の学生、大学院生も含めて若い力が精力的に調査した。

漁業被害のため駆除されるトドを極力回収することが主要な調査活動であった。それ故、胃内容物、生殖器、寄生虫、頭骨、生体計測による食性、繁殖、寄生虫、発育に関する研究が行われた。これらは水産庁や道庁の調査費に基づいたが、回遊生態を明らかにする組織立った海上調査は出来なかった。そして、なぜか漁業被害の具体的状況、各漁家への経済的影響の調査は行政から求められなかった。

今回のまとめで、本格的にトドの食性が羅臼沖を中心として海況や魚類群集との関係で明らかにされた。又、1995・96年に海獣談話会とロシアの共同で行った千島のトドパップの標識付けも含めて、北海道周辺でのサハリン・千島両系統群の混合についてやっと議論が出来るようになった。

トド被害の実態を少しでも明らかにしたいと思ったが、その原資料にあたる、いつ・どの海域で・どの位のトドが駆除されたか・どの程度の被害があったかの原簿が道庁には残されていなかった（おそらく廃棄された）。各種資料や論文を参考にしていくつか結論を出した。(1)トド被害は個体数の激減の時期から顕著になり、トドが増加して被害が出るのではない。おそらく魚類のとりすぎと関係する。(2)トド駆除は被害軽減には無関係である。さらに、1958年から現在までの駆除数は23,000頭に達し、これが千島系統群激減の主要因であることを指摘した。

では、どうしたらよいかについて私達は多くの問題点を記したが、生態・保全に関する基礎的研究を重視して研究者集団を育てることが緊急に必要であることが結論の1つである。トドの駆除やゼニガタアザラシの定置網での溺死は北方四島の個体群に甚大な悪影響をもたらしていることからしても研究は日露共同が必然である。

私達海獣談話会は1991年から現在までサハリンのチュレニイ島、コマンドルスキー諸島、千島列島中・北部で鰭脚類調査を行ってきたが、トドと同じアシカ科のオットセイについて比較のためにオス、メスの社会生態、パップの死亡要因分析の3篇ものせた。

北海道周辺にしかない、人間からいためつけられている鰭脚類の調査・研究の拠点が道内に作られ、若者が育つことを望まずにはいられない。



国後島・羅臼山の植生

副会長 佐藤 謙

この夏、「北方四島・国後島・爺爺岳（ちゃちゃだけ）専門家交流訪問団（勝井義雄団長、北方圏火山研究会・朝日新聞社・テレビ朝日グループ共催）」の一員として、初めて国後島を訪れることができました。爺爺岳の植物は日口共同研究として別に発表しますので後のお楽しみとしておき、ここでは、滞島最終日に観察した羅臼山（メンデレーエフ火山、標高856m）の植生について紹介しましょう。

羅臼山は、島最大の居住地、古釜布（ユジノクリリスク）の南西側に近くあり、北東方向の爺爺岳とはかなり離れております。この火山は、記録上は1880年に爆発しただけと言われておりますが、現在でも山腹の4つの硫気孔原から常に硫気が噴出し、監視が必要な火山とされております。

8月4日、当日は国後島において年に3日ほどしかないという30度を越える真夏日でした。古釜布港から砂利道をバスで約20分、羅臼山の東麓、標高約30m地点から沢沿いの歩道を歩き始めました。約1時間で標高80mの温泉に到着、早速、わき出る85度の熱泉に沢水を加え、露天風呂を楽しむ人がほとんどでした。その間にまだ仕事をしよう、さらに上流の硫気孔原までさかのぼり、ガスを採集しようという火山ガス調査班、それに同行させていただきました。大急ぎで大汗をかきながらの沢登り、約40分で標高約180mにある硫気孔原に達しました。このルート沿の植生概況は、以下の通りです。

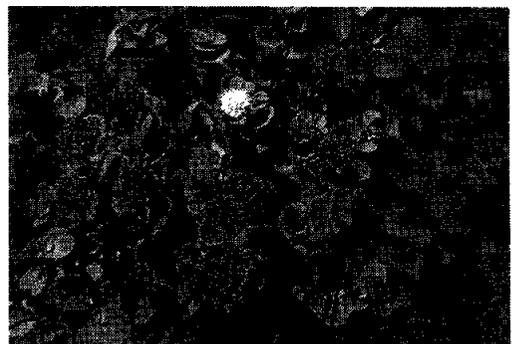
バスから眺めた山麓部は、林冠でトドマツとダケカンバが多く、林床でクマイザサが優占する針広混交林に覆われていました。この林は、樹高が比較的低く、かつて伐採された森林と感じました。しかし、歩道を歩き始めると、アカエゾマツの純林が続き、わずかにトドマツが優占する小団林も見られました。これらの林床ではクマイザサ、チシマザサ、あるいは大型藓類がそれぞれ優占する林床タイプが認められ、他にナナカマド、ノリウツギ、ミヤマハンノキ、コヨウラクツツジ、エゾクロウスゴ、オオバスノキ、イワツツジ、ゴゼンタチバナ、ツルツゲ、ツルシキミ、ツルアジサイ、ツタウルシ、スギカズラ、アスヒカズラ、ヒカゲノカズラ、シラネウラボ、ヤマドリゼンマイ、コイチヨウラン、キソチドリ、エゾスズラン、コイチヤクソウ、ミヤマスマレ、コミヤマカタバミ、コガネギク、ダチヨウゴケ、オオフサゴケ、タチハイゴケ、チシマシッポゴケ、ホソバミズゴケなどが見られました。

標高約180mの硫気孔原は、総じて、強い硫気臭、低い土壌pH（強酸性）、高い地温の立地環境でした。硫気孔原の植生は、硫気を吹き出す高温で土壌pHが低い中心部から、地温がやや低くなり土壌pHがやや高くなる周辺部まで、無植被地、コメススキ純群落あるいはススキ純群落、イソツツジ群落、そしてハイマツ群落の順序で配列していました。ここから稜線部や山頂部を見上げますと、ハイマツ群落が沢筋にある硫気孔原と山頂部にかなり離れて見られ、その間にアカエゾマツ林が成立しています。すなわち、まだまだ森林限界に達していない標高、200m未満の標高でありながら、ハイマツ群落が成立し、他の高山植物が生育していることになります。この理由は、川湯硫黄山など道内の硫気孔原と同様に、硫気の直接的な害作用と土壌が強酸性となる間接的影響によって普通の植物が生育できず、その代わりに、それに耐えることができる高山植物が生育するのだと考えられます。

ところで、登山口から温泉に至る間、沢に接してしばしば、しかしそれぞれは小面積ですが、イソツツジ、エゾノマルバシモツケ、シラタマノキ、モウセンゴケ、コメススキ、ヒメスゲ、エゾホソイ、時にハイマツなど高山植物が集中して出現するところがありました。これらの場所は、土壌表面が白っぽくなっており、硫気孔原から流れる強酸性の水に影響されていると考えられます。これらは、硫気臭は感じられませんでした。土壌の性質から一種の硫気孔原と言えるでしょう。

さらに、沢沿いに冷温帯性の落葉広葉樹、ケヤマハンノキ（標高50m）とハリギリ（80m）が見られました。しかし、これらは単木として出現したに過ぎませんでした。この植生は、基本的に、亜高山ないし高山性の植物群落から構成されていると言えます。

羅臼山の植生は、全く北海道との共通種、北海道と共通する植物群落から形成されていました。しかし、この島の自然は、国立自然保護区の爺爺岳だけではなく保護区に指定されていない羅臼山でも、「あるがままの自然が残されている」、そう強く印象づけられました。素直に伸びた大形木からなるアカエゾマツ林に見ほれておりますと、同行した鮫島惇一郎さんは「北海道の森林も50年前まではこうだったな」と感慨深げにつぶやいておりました。このつぶやきは、決して忘れることができません。



エゾノマルバシモツケ

動植物に素人の私が、せっせと京極揚水発電所予定地に通うことになってしまった。イイジマルリボシヤンマが、北電の環境アセスによって発見されたという新聞記事を読んだからである。とにかく現地が何処なのかという確認作業から始めなくてはならない。7月初めから、休日を利用してペーペナイ川をウォッチングすることにした。

京極揚水発電所の問題点は、ご存じのように、泊3号機の増設に伴う余剰電気を捨てる装置といわれている。現地で何が起きているかを報告したい。

湿原周辺・ペーペナイ林道には、北電発表で貴重種の動植物が多い。その中には、生きた化石といわれるムカシトンボ、北限が変更になるかもしれないイイジマルリボシヤンマ、定山溪ではじめて発見されたジョウザンシジミ、魚類では、道南では貴重なオシヨロコマ、植物では、貴重種のヤチラン、エゾマンテマ、札幌山鼻地区ではじめて発見されたヤマハナソウ。エゾムカシヨモギだってどうだろう。鳥類では、クマガエラ、オジロワシ、オオワシ、クマタカ等もいる。エゾヒグマに至っては、その辺をノソノソ歩いているらしく、糞が200メートル、時には100メートルおきに山を作っている。第一は、豊饒な自然が破壊されると言うこと。

次に、本俱登山一体は、新第三紀を基礎とする地質である。凝灰岩や凝灰質集塊岩を主体とする火山岩類からなる。変朽安山岩、緑色凝灰岩も見られる。これらの地質は、もろく崩れやすい。そのためいつも崖崩れが起き、ペーペナイ川の川石は、角張った印象を受ける。こんな危うい地質の場所に、411万5000立方メートルの水が上下する施設をつくってよいものだろうか。金属疲労ならぬ、岩盤疲労が心配される。適地とは思われないと言うのが第二です。

第三は、調査工事についてです。下池のための直径2メートル前後の横穴・縦穴の地質調査試堀坑6本、無数のボーリング跡、地下発電所のための試堀坑も掘られている。これはすでに900メートル以上も掘られている。上部池のためには、確認したものだけで、3本の縦穴の試堀坑が掘られ、調査済みものの中には、すでに埋設されているものもある。

植物の試験苗床もある。湿地には地下水監視施設も付けられている。

道道京極定山溪線は北電の調査工事のために改良工事が行われており、下部は、おそらくアスファルトの道路になるものと思われる。中間部は、双葉ダムのサイト周辺がすでにアスファルトになっている。ペーペナイ林道入口までは、北電が発注者になり測量を済ませ、じゃまな木は伐採され、改良工事の準備がなされている。

ペーペナイ林道は閉鎖され、北電の鍵で施錠されている。黙ってはいると、どこからか北電職員が現れ、入林許可証があるかと尋ねる。森林管理署は北電から1個の鍵を預かっている。入林許可を取っても鍵は北電から借りてほしいという始末。一体誰の森林なのかと思う。すでに、土砂捨て場、採石場の下準備がなされている。これらは、調査工事の範疇を越えていないのかと疑問に思う。

山奥のことで、人目には触れないが、ずいぶんの暴挙が進められていると思う。

「ハチの刺し」は、結構怖い。いつか一刺ししてやろうと、地元でほぞを喰んでいる。

(倶知安町在住)



北海道の

西岡公園のパークゴルフ場はどうなったか

山田 三夫

(西岡の自然を語る会代表)

9月22日現在、札幌市が西岡公園内に計画していたパークゴルフ場は白紙撤回されたことをご報告します。これも多くの皆さまをの支援の賜物とお礼申します。しかし今回の問題は札幌市と市民の間に大きな意識のズレがあって生じたものであり、いくつかの点を指摘しておかなければならない。

はじめ市は計画を立てた理由を「キャンプ場の施設充実」と言っていたのに、さまざまな団体から反対の声が挙がるなかで「お年寄りの健康づくりのため」一辺倒に変わっていった。これは行政の情報公開でいうところの「説明のつかない計画」だったことを自ら認めたことになるだろう。また町内会連合から要望があったといってすぐに計画を立てる両者の関係も大いに疑問だ。現に計画地に最も近い町内会では70%以上が反対を訴えたのである。さらに札幌市は最後まで環境に影響はないし調査の必要もないとしていたことだ。

上空からの写真を見るまでもなく計画予定地は、池を中心にしたコア部分を守るバッファの役割を果しているのがわかる。バッファを消滅させると生物生息域に大きな影響を与えるのは自明なのである。数名の専門家に意見を聴いたというが、これは環境アセスのスクリーニング段階で調査必要なしとしたのであり、札幌市の見識が大いに問われる結論の出し方であったことも明記しておきたい。

(札幌市在住)

市街地周辺の乱開発

高畑 滋

(理事)

札幌市清田区清田川上流で乱開発が行われていると、協会にファックスによる市民からの投書がありました。地図に示された場所に行ってみて驚きました。清田川が消えています。約5ヘクタールの土地が資材置き場造成のために埋め立てられている最中でした。宅地造成規制法区域ですが資材置き場造成で土取り、盛り土工事が許可されている表示がありました。清田地区では大きな宅地造成が2ヶ所あって、そこから出る切り上を運んでいるようです。清田川はコンクリートケーソンでトンネル排水にして、深い谷を埋め立てて平らにする計画です。法手続きの上では開発行為は認められているものですが、何とも釈然としません。民有林の林地開発許可では特定開発行為の対象地の25%を代替植林させることになっていますが、これも場所は特定せず、通常は用地周辺の隔離林として植林される例が多いようです。河川周辺の林地は保護されるようになっていません。結果として清田南公園から羊ヶ丘国有地までつながっていた緑の帯は断ち切られることになりました。生物は川の上流から移動してきますが、途中で水はトンネル排水にされ、河畔林は埋め立てられたのではつながりません。軽い火山灰台地を造成した清田団地では、1968年十勝沖地震で、崩壊・陥没・泥流の大災害を起こした所です。この痛い教訓を周辺土地利用の自然保護に生かさなければなりません。地域住民の問題として清田選出の市会議員にみてもらい今後の課題としてもらいました。自然保護協会として力不足ではありましたが、問題の提起には役割を果たせたと思っています。これからも地域での監視をお願いします。(札幌市在住)

母道 ニュース

『エゾリスの通る道』のその後—— 福島 政幸

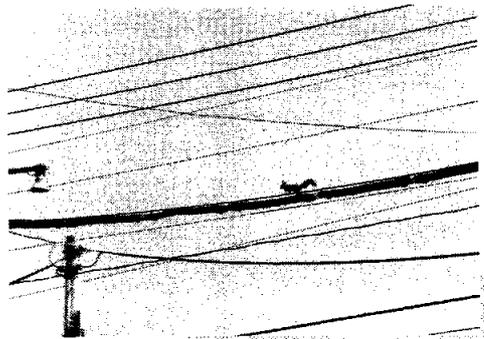
(帯広市 公園と花の課)

帯広市の南部、帯広の森に隣接して、大空団地を包み込む緑地帯がある。植樹から30年余り経過したこの緑地帯は、木々が十分に生い茂り、チョウセンゴヨウマツが多いせいか、その実を好物とするエゾリスが住みついている。この緑地帯は市道で分断されており、『エゾリスの通る道』は分断された緑地間をエゾリスが安全に往来できるよう、市道上に架けられたエコブリッジである(平成8年12月設置)。

エゾリスに渡ってもらうために、どんな構造がいいのかと思いめぐらせている時には、リスの横断歩道と言うべきエコブリッジを本当に渡ってくれるものなのか、人間の交通マナーを思うと自分でも半信半疑であった。帯広市には以前から地道に活動が続けている市民団体の『エゾリスの会』があり、実施に当たって、貴重なアドバイスをいただいた。おかげで、翌年の4月には、エコブリッジを渡るエゾリスの姿をカメラに収める事ができ、新聞などでも大きく取り上げていただいた。

設置した後に交通事故に会おうものなら、思慮が足りないとお叱りを受けるのは明白な状況で、エゾリスに心の中で“ありがとう”と叫ぶのと同時に、ホッと胸をなで下ろした。現在も、『エゾリスの会』のメンバーが観察を続けてくれている。

平成10年11月には、NHK教育テレビの「サイエンスアイ」でも取り上げられ、丸太の吊り橋を通学路とでもしているかのように渡るエゾリスの姿がビデオで紹介された。他の自治体からの問い合わせも複数あり、新たな土地で小さな命を守る事例となった事は喜ばしい限りであるとともに、発信地となった帯広市の役割を十分に考えて行きたい。(帯広市在住)



国際シンポジウム

「北方四島の自然保護を考える」



北海道自然保護協会では、1992年から北方四島の自然保護の重要性を各方面に訴えていました。北海道にあってあった豊かな自然が北方四島には未だ残されていること、北海道の自然史を考える上で千島列島・サハリンは重要であること、この地域の自然を保護出来ないで北海道の自然保護はありえないこと等の理由で、北方四島の自然保護に注目しています。この度東京（9月28日）と札幌（11月20日）でシンポジウムと写真展を開くことになりましたので、是非ご参加ください。

日時：1999年11月20日（土）

10：00～15：30

会場：かでの2・7 520研修室
（札幌中央区北2条西7丁目）

会費：無料

プログラム

挨拶 大泰司 紀之

午前：解説

千島の自然史 五十嵐八枝子

千島の植物 佐藤 謙

沿岸生物保護と漁業の関係
小城 春雄

鱭脚類きまぐくの現状と海洋生物圏保全
和田 一雄

昼食休憩；「北方四島の自然」写真展

午後：解説

極東と北海道の渡り鳥とその保護
Vladimir Zykov

パネルディスカッション

「北方四島の自然を後世に伝えるために」

基調講演：

北方四島自然保護の現状と問題点
近藤 憲久

コーディネーター：

北海道自然保護協会会長 俵 浩三

主催：北方四島の自然保護を考える会
北方四島自然問題協議会
日本野鳥の会

協賛助成：世界自然保護基金日本委員会

後援：自然保護助成基金、北海道自然保護協会、日本生態学会、日本生態学会北海道地区会、日本哺乳類学会、野生生物保護学会

申込連絡先：北海道自然保護協会

Tel/Fax：011-251-5465

e-mail：nchokkai@jade.dti.ne.jp



ウトウの大量死、根室でも

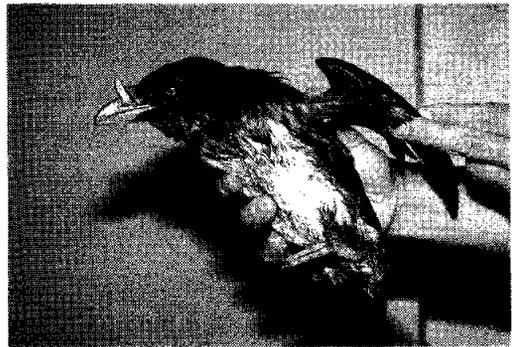
6～7月、日本海に浮かぶ海鳥の大繁殖地の天売島をはじめ、留萌から宗谷地方にかけての海岸に多くのウトウが死体となって打ち上げられた。ウトウはウミスズメ類で、北海道などで繁殖し冬に南下する海鳥である。死体は北海道大獣医学部で病理解剖されたが、決め手となる原因が解明されないままだ。その後、ロシアのサハリンや国後島でも大量死があったとのこと。

8月下旬、根室の春国岱ネイチャーセンターに行ったとき、油汚染の海鳥の保護の話をしていた。

その矢先、「ウトウを海岸で保護した」と連絡が入り、一瞬ドキリとした。届けられた鳥を診察し、呼吸器症状が認められたが、手当てのかいなく死亡してしまった。同センターの調査で、多くのウトウの死体が確認され、関係者は大あわてに

なった。

研修中の獣医学生らと死体回収に出掛けたが、2時間で何と242羽を拾った。今までは死体ばかりで、今回は生体保護が4羽で初めてのことがあったが、数時間後に死亡した。死亡を覚悟して採血すれば、原因解明の重要な参考になったはず、と反省することしきり。



ビザ無し交流による 北方四島の自然写真展

北方四島には、北海道で少なくなってしまった貴重な自然が残っています。

オオワシ、オジロワシ、シマフクロウ、エトビリカなどの鳥たち、ラッコ、トド、アザラシなどの海獣類、そして可憐な高山植物が海岸近くで咲き乱れます。この豊かな自然をいつまでも残してほしいと写真展を企画しました。

皆様お誘い合わせの上ご覧下さい。

日 時：1999年11月15日（月）～19日（金）

会 場：道庁1階・道民ホール
北方領土コーナー

主 催：北海道

協 力：北方四島の自然保護を考える会・
北方四島自然問題協議会



会員拡大キャンペーン

期間内に入会されると以下の特典があります。是非、お知りあいの方をお誘いください。

◎期 間 1999年12月末日まで

◎上記期間内に年会費を入金していただくと、1999年度の会報（「NC Hokkaido」年4回発行）と会誌（「北海道の自然」年1回発行）が無料配布されます。

◎入金された年会費は2000年度の会費として扱い、2000年4月1日から正会員として登録されます。

1999年自然保護学校開校のお知らせ

当協会では、昨年に引き続き自然保護学校を開校いたします。昼の開校が好評でしたので昨年同様、今年も昼・夜と開校する事にいたしました。

私たちを取り巻く環境を良い状態に保つために、自然をよく知り、自然が大切である事を理解していただける内容で講座を組み、第一線でご活躍の方々に講師をお願いいたしました。

スライド、OHPなどを使い、分かりやすい内容になりますので、たくさんの方々の参加をお待ちしております。

1. 会 場 かでる 2・7 510号室、視聴覚室、210号室

札幌市中央区北 2 条西 7 丁目

Tel 011-231-4111 (内線 36-111)

2. 日時・講師

*昼・夜とも同日、同室ですが、諸事情により曜日、場所が変わっておりますから充分注意してください。

昼の部 10:00から12:00

夜の部 18:30から20:30

11月10日(水)開校式

「国後島に見た自然」 鮫島惇一郎

(自然保護学校校長・自然環境研究室主宰) 510号室

19日(金)「海の獣—^{きまぐく}鱒脚類を知ろう」

和田一雄

(野生生物保護学会会長) 視聴覚室

24日(水)「川の生き物たち」 稗田一俊

(フリーランスカメラマン) 510号室

12月1日(水)「続・動物医の本音」 森田正治

(道東野生動物保護センター長)

210号室

9日(木)「渡り鳥は何処へ行く」 大館和宏

(当協会理事) 210号室

閉校式 修了証授与

*事情により講師の順序が変わる事があります。

3. 会 費

資料代として昼の部・夜の部とも

一 般 4,000円

北海道自然保護協会員 3,000円

学 生 2,000円

(いずれも第1回目の受付時に徴収)

4. 定 員

昼の部 50名 夜の部 50名

5. 申込方法 11月6日までに協会事務局にお申し込みください。

TEL・FAX 011-251-5465

会員の皆様に「会員拡大」のお願い

会 長 俵 浩 三

会員の皆様には、当協会の活動に関し、いろいろな面でご支援いただき、ありがとうございます。

おかげさまで当協会が永年にわたって最重要課題にとりくんできた、千歳川放水路問題、大雪山・士幌高原道路問題は、ともに当協会の主張が認められる方向で、一段落いたしました。これも、会員の皆様をはじめとする多くのご理解と協力による自然保護世論の高まりに支えられた賜で、感謝にたえません。

しかし北海道の自然保護をめぐるのは、まだまだ多くのとりくむべき課題があり、21世紀に向かって、よりよい自然環境を残すことは私たちの責務だと思っています。その場合に重要なのは、社会のいろいろな価値観があるなかで、自然の大切さを理解し、自然保護を支持する方々の輪を大きく広げる必要があることです。「数は力なり」という言葉がありますが、自然保護は現在のところまだ少数派です。

当協会の活動は、会員の皆様からいただく会費を基本に運営されています。現在の会員数は千名規模ですが、この数年、会員数が伸び悩んでいるのが実情です。また不況の影響で残念ながら団体会員は減る傾向がみられます。会員数が増大すれば活動の基盤も強まり、社会的な発言力、影響力も、それに比例して強まってきます。

いま理事会では「会員拡大」にとりくんでおりますが、会員の皆様も、お知り合いの方を当協会へ入会するようお誘いして、自然保護の輪を広げることにご協力していただけますよう、よろしく願い申し上げます。

入会の申込書その他の問い合わせ先は、TEL・FAX 011-251-5465 北海道自然保護協会事務所です。

活動日誌

1999年7月

- 8日 第6回夏休み自然観察コンクール作品
募集要項配布
- 23日 狩猟鳥獣の捕獲禁止等に関する公聴会
に出席。意見陳述
- 24日 第2回理事会
- 28日 NC107号発送

1999年8月

- 17日 第3回拡大常務理事会
- 17日 会誌38号編集会議

1999年9月

- 5日 京極揚水発電所建設予定地を現地調査
- 14日 第6回夏休み自然観察記録コンクール
募集締切り
- 18日 第3回理事会
- 24日 自然観察記録コンクール応募作品の審
査会を開催。入賞者決定

寄付金

市川利美	20,000円
佐藤正秀	5,000円
相原繁喜	2,000円

雪だるま基金

木村マサ子	5,000円
市川利美	30,000円
北海道自然観察指導員連絡協議会 然別湖研修会参加者一同	20,000円

(以上敬称略。ありがとうございました)

寄贈図書を紹介

- | | |
|--------------|-------|
| トドの回遊生態と保全 | 和田 一雄 |
| レッドデータ日本の哺乳類 | 市川 利美 |
| 牧野植物図鑑の謎 | 俵 浩三 |

要望書など

- 1999年7月30日 北海道知事宛
「エゾシカの捕獲禁止および制限」を強化する
ことの要望書
- 1999年9月6日 北海道知事宛
大雪国立公園土幌高原地域の適正な保護・利用
計画の立案を求める要望書

新会員紹介

99・5・10から99・10・4まで

- 【A会員】相原 繁喜 青木三智枝 石川 純雄
岡部 将樹 小畑 裕子 金丸 忍
紀 美智 北川 道生 木村 博明
久野 裕之 河野 寿子 小寺 昭彦
小宮 伸二 斉藤 愛 齋藤 論
佐々木充人 沢口 一洋 白鳥すゑ
杉村 政彦 鈴木 理香 瀬川 正則
関口 隆嗣 高島 誠之 高橋 公栄
高谷 弘志 田野 祐子 遠山あづさ
富山光太郎 蜂谷 夕子 林 満
引地 克彦 福間 理恵 藤澤 昭
三浦恵美子 三上可奈子 山田 正明
柳岡かおり 室井美喜子 小川 治
岡田 晃 小林 悟朗 重原 祐治
嶋田 久夫 工藤 光信 樋口 孝城
紅葉 昭彦 山田 勇
- 【B会員】沢口 光子 引地輝代子
- 【学生会員】浅井 美樹 井手百合子 小野 貴司
柏瀬 礼乃 加藤真佐子 古賀久美子
後藤 真咲 近藤 陽子 野村 典子
森本陽美記 山上 祐輔

* お知らせコーナー *

自然観察会のご案内

「冬の野鳥観察」

カシラダカ、ミヤマホオジロ、アトリ等の冬鳥と、カラ類、キツキ等の観察。木の葉も落ちて鳥の観察には最適な時期です。

日時・集合場所：2000年1月22日（土）
北大苫小牧演習林入口
10時集合 解散12時30分
持ち物：防寒着、図鑑、双眼鏡

「冬芽と野鳥観察」

春を待つ樹木の観察と冬鳥、カラ類、キツキ等の観察
日時・集合場所：2000年2月26日（土）
西岡水源地事務所前
10時集合 解散12時
持ち物：防寒着、図鑑、双眼鏡

以上のお問い合わせ・申し込みは
(社)北海道自然保護協会
札幌市中央区北3条11丁目加森ビル5・6F
TEL・FAX (011)251-5465まで

会費納入のお願い

会費納入については日頃ご協力をいただいておりますが、未納の方は至急納入下さいますようお願いいたします。

個人A会員	4,000円
個人B会員	2,000円
(A会員と同一世帯の会員)	
学生会員	2,000円
団体会員 1口	15,000円

〔会費納入方法〕

郵便振替口座 02710-7-4055
北海道銀行本店(普通) 101444
札幌銀行本店(普通) 418891

**第6回夏休み
自然観察記録コンクール入賞者**

応募数 104点
審査日 1999年9月24日
審査員 谷 博(北海道新聞野生生物基金事務局長)
俵 浩三(北海道自然保護協会会長)、
佐藤 謙(同副会長)、伊達佐重(同常務理事)、
熊木大仁(同常務理事)、福地郁子(同常務理事)、
大久保フヨ(同理事)、鮫島惇一郎(自然環境研究室主宰)

金賞

伊藤 結美(恵庭市立若草小学校・4年) タンポポの研究

銀賞

坂 尚憲(札幌市立緑丘小学校・6年) くもの観察
秋葉 凜樹(函館市立東山小学校・1年) なつとほくと虫たち

銅賞

嶋崎 孝平(小樽市立望洋台小学校・5年) 木に集まる虫しらべ
坂 和優(札幌市立緑丘小学校・4年) だんご虫の観察
本間 詩織(札幌市立太平小学校・3年) カイコの一生
政田 駿(札幌市立南の沢小学校・3年) アリジゴクの観察
樋田 梢(釧路市立旭小学校・2年) しつげんのホテル
山本 沢(恵庭市立若草小学校・1年) しぜんのかんさつ

佳作

三谷友理恵(恵庭市立和光小学校・6年) 4種類の水と切り花の観察
内田健太郎(札幌市立新発寒小学校・5年) 中の川の微生物
谷村 梨紗(札幌市立緑丘小学校・5年) アゲハチョウについて
内藤 格(札幌市立共栄小学校・5年) クワガタの生態
稲葉 貴子(函館市立柏野小学校・4年) カタバミのせいしつ
大泉 輝晃(札幌市立新発寒小学校・4年) 恐竜の不思議
加藤 汐里(紋別市立潮見小学校・4年) 雑草調べ
榊真 奈美(北広島市立広葉小学校・4年) 野鳥観察
光畑 元晴(中富良野町立宇文小学校・4年) トノサマバッタの成長記録
杉原 航太(旭川市立西神楽小学校・3年) コスズメの成長
曾我 章太(札幌市立清田南小学校・3年) フタホシコロギのかんさつ記録
竹中 諒(札幌市立信濃小学校・3年) 昆虫日記
木戸浦大樹(函館市立北美原小学校・2年) すず虫かんさつノート
小上 拓也(札幌市立あいの里西小学校・2年) かぶと虫新聞
柴田 泰行(音別町立音別小学校・2年) ほくの登山記録
二階堂鷹誠(道教育大附属札幌小学校・2年) アリのかんさつ日記
田村 桃子(紋別市立潮見小学校・1年) くわがた につき
望月 礼奈(別海町立豊原小学校・1年) ひまわり

学校賞

北広島市立広葉小学校
札幌市立新発寒小学校
札幌市立緑丘小学校
紋別市立潮見小学校

※ この紙は再生紙を使用しています。

